

「源氏物語と齋宮」記念講演会

紫式部 — その三つの人生

20240518 (Sat)

国際日本文化研究センター (日文研)

総合研究大学院大学 (総研大)

倉本 一宏

紫式部の人生

1. 妻 (妾) として、母として

— 『紫式部集』から

2. 『源氏物語』『紫式部日記』作者として

— 『紫式部日記』から

3. 彰子の申次女房として

— 『小右記』から

長徳二年（996）秋

為時は越前に赴任し、紫式部は父に従って越前に下向

長徳四年（998）の冬 宣孝と結婚（妾）

長保元年（999） 賢子を出産

長保三年（1001） 宣孝死去

2. 『源氏物語』『紫式部日記』 作者として

『源氏物語』の執筆

紫式部は出仕以前に、第一部 a 系のうち、光源氏の生い立ちと藤壺・紫の上との関係を描いた部分と、光源氏の須磨流寓から都召還を描いた部分の途中くらいまでを執筆

出仕後に、光源氏の都召還以後を描いた部分のつづきを執筆
折々に第一部 b 系の、女性遍歴を描いた巻（もしかしたら出仕前か）、女性たちのその後を描いた巻、玉鬘十帖を執筆

その後、第一部 a 系の残り、六条院の完成と栄華を描いた巻を執筆

第二部の女三の宮降嫁、光源氏の死、第三部の光源氏死後の世の中、そして宇治十帖を執筆したのは、さらに後のこと

道長の命令

『源氏物語』という物語は、はじめから道長に執筆を依頼(命令)され、料紙などの提供を受け、基本的骨格についての見通しを付けて起筆

道長はおそらくその文才を、為時か宣孝を通じて知らされていた

ちょうど彰子が入内・立后したものの、一条天皇に会ってもらえない時期

道長の目的が、この物語を一条天皇に見せること、そしてそれを彰子への寵愛(つまり皇子懐妊)につなげるつもりであったことは、言うまでもない

彰子と一条天皇に懐妊の「可能性」が生じた頃(寛弘三年(1006)十二月二十九日)、『源氏物語』を携えて彰子に出仕
彰子、敦成親王を出産(寛弘五年(1008)九月十一日)

紫式部、御産記としての『紫式部日記』を執筆

女性の手による仮名の御産記(場所、感情)

道長の命令によるもの

盛儀を仮名で詳細に記録させ、先例として残したかった

3. 彰子の申次女房として

『小右記』

「賢人右府」藤原実資の日記

二十一歳の貞元二年(977)から八十四歳の長久元年(1040)

までの63年間に及ぶ記録

当時の政務や儀式運営の様子が、詳細かつ精確に記録

平安時代史の最重要史料

訓読文で現存2,098,179字(『源氏物語』は943,135字)

『紫式部日記』「五十日の祝い」

右大将(藤原実資)にちょっとした言葉なども話しかけてみたところ、

ひどく当世風に氣どっている人よりも、右大将は一段とご立派

でいらっしゃるようであった。

『紫式部日記』「人々の容姿と性格」

(宮の大夫<藤原齊信>)ほかの公卿がたで、中宮さまの御所に参り慣

れていて、何か啓上なさるときは、めいめいひいきにしている女房

(「心よせの人」)がいて、しぜんそれぞれに昵懇で、そのお目あて

の女房がいないときはつまらなそうに立ち去ってゆくのです

が、…

『枕草子』三「正月一日は」

除目のころなど宮中のあたりはとてもおもしろい。雪が降りひどく凍っている時に、上申の手紙などを持ってあちこちしている四位や五位の人の、若々しく、気持もさわやかで元気のよさそうなのは、とても頼もしい様子に見える。だが、年にとって頭の白い人などが、人に自分の内情を話して頼み、女房の局などに寄って、自分の身の立派である由来などを、いい気になって説明して聞せるのを、若い女房たちはまねをし笑うのだけれど、本人はどうして知ろうか。「どうぞよろしく主上に申しあげてくださいませ。皇后様にも申しあげてくださいませ」などと言って、それでも、思い通りの官を得たのはたいへん結構だ。得ないでしまったのは、とても気の毒なことである。

1. 『小右記』長和二年(1013)五月二十五日条

(東宮の病状を女房に探らせる)

(藤原)資平を昨夜、密々に皇太后宮(藤原彰子)の許(枇杷殿)に参らせて、東宮(敦成親王)の御悩の間、假によって参らなかつたことを啓上させた。

今朝、帰って来て云ったことには、「昨夕、女房〈越後守（藤原）
為時の女。この女を介して、前々も雑事を啓上させていた。〉に逢
いました。

あの女が云ったことには、『東宮の御悩は重いわけではないので
すが、やはりまだ尋常というわけではありませんうえに、熱気が
まだ散じられません。また、左府（藤原道長）もいささか患う様
子が有ります』ということでした」と（伏見宮本〈略本〉宮内庁書
陵部蔵）。

前々から取り次ぎに使っていたとなると、この記事の前後に実資と
彰子の間を取り次いでいた「女房」も、紫式部であった可能性が高
い。三条朝、実資は養子の資平の人事に関して、彰子を介して道長
に渡りをつけていたのである。「申次女房」と称すべきか。



『小右記』（伏見宮本）長和二年五月二十五日条（宮内庁書陵部蔵）より一部抜粋

2. 『小右記』 長和元年(1012)五月二十八日条

(彰子の許で一条院を懐旧して落涙する)

皇太后宮（彰子）の許（枇杷殿）に参った。しばらく渡殿に伺候した。女房が御簾の中から菅円座を差し出したくもともと、畳を敷いていた。その上に円座を差し出した。>。

女房の意向は、近く伺候するようにとのようであった。しばらく見入れないかのように伺候した。ところが頻りにその意向が有った。そこで進んで伺候し、女房に逢った。先日の仰せ事の恐縮を啓上させたく御八講に参った事である。>。

すぐに御書状を伝えた。また、多くは故院（一条院）の御周忌法会が終わったという事であった。「室礼を替えたので、はしたない（きまりが悪い）状態である」と云うことだ。

御簾は皆、尋常のようであった。懐旧の心を急に催し、落涙を禁じ得なかった。女房が見ている所を憚らず、時々、涙を拭った。
やはり留めがたかった。

3. 『小右記』長和元年(1012)六月六日条

(道長病悩の間、彰子の心労見舞いを、資平を介して女房
に伝えさせる)

皇太后宮(彰子)の許(枇杷殿)に参った。しばらく伺候した。
左相府(道長)が病悩されている間、心労なされているのではな
いか。そこで資平を介して女房に伝えさせた。

おっしゃって云われたことには、「時々、参入した事は、歡び思っ
ていたのであるが、今日、また参入し、訪ね申してくれたことが
有るのは、いよいよ悦びに思うところである。この何日かは、相
府(道長)の病に嘆息していた。ところが昨日から宜しいという
ことを聞いて、喜んでいる」ということだ。

6. 『小右記』長和二年(1013)二月二十五日条

(彰子が饗宴を取りやめさせた事情を女房に問う)

今日、諸卿は一種物を提げて皇太后宮(彰子)の許(枇杷殿)に
参会した。資平は先ず左相府(道長)に参った。記し送って云っ
たことには、「今日の饗宴は停止となりました。左衛門督(藤原)

頼通。>が、私（資平）の車に乗って、左府から三箇度、皇太后宮に参りました。事情が有るようなものでした」ということだ。

夜に入って、資平が来て云ったことには、「左金吾（頼通）は往復しました。私も同車しました。事情を問うたところ、金吾（頼通）が云ったことには、『今日の事は、后（彰子）に許さないという意向が有った』ということでした。左相府は参られませんでした。また、心神が宜しくないということを称されました。後の御意向が許さないことによるものでしょうか」ということだ。

事情を女房に取ったところ、云ったことには、「宮（彰子）がおっしゃって云われたことには、『この何日か、中宮（妍子）では頻りに饗饌が有った。卿相には煩いが有るのではないか。月は無く、花も無い。事に触れて、思いが有るところである。諸卿も必ず思うところが有るのではないか。また、二の舞のようなものである。相府（道長）がいらっしゃる間は、諸卿は響応しているが、退出して誹謗しているのではないか。ましてや死去した後には、なおさらである。連日の饗宴で、人力は多く屈しているのではないか。今、これを思うに、はなはだ益の無い事である。停止するのが、もっとも当然であろう』ということでした。そこで左府は参入さ

れませんでした。参会した諸卿は興醒めし、直ちに退出しました」ということだ。賢后と申すべきである。感が有った、感が有った。また、資平が云ったことには、「女房は汝（実資）が参るかどうかを問うていました」ということだ。

7. 『小右記』長和二年(1013)三月十二日条

（彰子が女房を介して実資の病悩を問う仰せ書を賜う）

皇太后宮（彰子）が、私の病悩を見舞われた女房を介して、仰書を資平に送った。>。

恐縮しているということを伝えて啓上させる為、資平を宮に参らせた。

今井源衛『紫式部』（吉川弘文館、人物叢書）

長和二年（一〇一三）以降、紫式部の姿は見え、道長の命令によって実資と彰子との取り次ぎ役を免じられ、これを機に紫式部は宮廷を退いた。

そして、宮廷を出た後の紫式部には、もはや人生というべきものはなく、家集をまとめたうえで、長和三年（一〇一四）に死去した。

為時が長和三年六月に任期を残して越後守を辞任し、長和五年（一〇一六）四月に出家したのは、紫式部に死なれたためである。

12. 『小右記』 寛仁元年(1017) 七月九日条

私は皇太后宮（彰子）の御在所（一条院）に参った。座を暖めずに退出した。

（紫式部が不在であったことによるものか。とすれば、いまだ生存していたことになる）。

14. 『小右記』 寛仁三年(1019)正月五日条

(彰子の年爵を固辞したことを陳謝する)

弘徽殿に参った。女房に逢ったく先ず宰相(資平)を介して事情を取らせた。御給爵の恐縮を啓上させた。

枇杷殿にいらっしゃる時に、しばしば参入した事を、今も忘れないということについて、仰せ事が有ったのである。

女房が云ったことには、「あの頃は参入したのに、現在は参らない。世の人と同じではない。恥ずかしく(立派に)思われているところである」と云うことだ。

20. 『小右記』 治安三年(1023)四月二十日条

(倫子病悩の見舞いを伝える)

太皇太后宮権大夫(藤原)経通は、御前に参るよう伝えた。参入し、簾の前に伺候した。

女房を介して、母儀(源倫子)が病悩されている事を伝えられた。

「今日は頗る宜しくいらっしゃる」ということだ。

『伊勢大輔集』（後に『新千載和歌集』に収載）

紫式部が清水寺に籠った際に、仲のよい伊勢大輔と会って、「院」の御料にと、ともに燈明を奉獻し、「紫式部」が檜の葉に書いて寄こした歌（彰考館本）

心ざし 君にかかぐる ともし火の おなじひかりに
あふがうれしさ

（同じ思いを抱いて、院のために同じ御燈火を奉り、あなたに逢って一緒に院の快復を祈願できたのはうれしいことです）

彰子が女院（上東門院）となったのは万寿三年（一〇二六）正月十九日のことであり、「院」というのが後の追記でなければ、かえってこの詞書はそれ以降も紫式部が生存していたことを示している。

『院号定部類記』一・上東門院所引『権記』

万寿三年（一〇二六）正月十九日条

彰子の出家、院号「上東門院」奉呈

共に出家した女房の記載あり

「また、宮宣旨く故（源）伊陟中納言の女。>・弁内侍く故（藤原）順時朝臣の女。>・大弁・大輔・大進・筑前命婦も尼となった」と云うことだ。

- ・紫式部はすでに死去していたか
- ・紫式部はすでに出家していたか
- ・出家せず女房として出仕し続けたか
- ・彰子の許を去り、里邸に帰っていたか

『院号定部類記』一・上東門院所引『小右記』

万寿三年（一〇二六）正月十九日条

彰子の出家、院号「上東門院」奉呈

共に出家した女房の記載なし

封戸・季御服・大炊寮の御稻・内膳司の御飯・年官・年爵・院号

（実資の目の届かない場の出来事、『権記』も伝聞記事）